

京都市西京区 大谷裕子（88歳）

私は京都の山科で生まれ、出身校は鏡山小学校です。学校の北にはJRと京津国道、疏水の流れる山を背景に天智天皇陵があり、毎月10日は全校生徒の参拝する日になっていました。時を定められた由来の日時計は、今も残されています。

小学4年生の12月8日、いつも校庭である朝礼が、その日は全員講堂に集合、まず目に入ったのは正面に掲げられた海軍士官の写真、そして校長先生から告げられたのは、真珠湾攻撃と日本が米国と戦争状態になったことでした。

昭和18年3月、鏡山小学校を卒業した私は、母の希望で同志社女学校へ入学、セーラー服を着た喜びも束の間、制服は母の着物で作ったもんぺ姿になりました。

当時、両親は地域の委員（当時の方面委員）もつとめて頼りにされていましたが、戦況が烈くなった昭和19年夏頃より体調を崩し、急遽京大病院に入院、病名は腎盂炎でしたが、当時母は37歳、死に至る病とは思っていませんでした。

年明けて昭和20年、戦況は烈くなり、医師不足の上に薬の投与もなく腎臓の昨日は日に日に衰え、排尿できない苦しみは、とても言い表し得ません。それでも、何か食べさせなくてはと、コーリャン入りのごはんを弁当箱に詰め、通学前に持参する日々が続きました。

6月半ばの日、何も欲しがらなかった母が「おみかんが食べたい」と言ってびっくり！当時物資は配給にて、とても無理とは思いましたが、近所の方をお願いしたところ、1個の夏みかんを早速届けてくださいました。枕元の夏みかんを見た時の何とも言えない嬉しそうな母の顔、今も忘れることができません。ほんの少しの実を口に含ませただけで、とても満足そうな表情になり、こと切れました。

今はどこにでもある夏みかん、でも、それがかなわなかった昭和の時代、1個の夏みかんを探し求めてくださった人の心の温かさ、今も夏みかんの時期になると、よみがえる私の悲しくて、大事な思い出です。